

平成20年 4月27日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520348
 研究課題名（和文） 新調査データに基づくびん東区方言の下位分類の再検討
 研究課題名（英文） Reconsideration of the classification of the *Mindong* group, based on the new data
 研究代表者
 秋谷 裕幸（AKITANI HIROYUKI）
 愛媛大学・法文学部・准教授
 研究者番号：10263964

研究成果の概要：“門+虫”が明朝体で入力できないので“びん”と平仮名で入力する。

自らが調査した寧徳方言（周寧咸村、寧徳九都、寧徳虎貝）および福安、霞浦、柘榮、福鼎、寿寧、蒼南、泰順方言のデータに基づき、びん語びん東方言の下位分類を再検討した。その結果、びん東語は南部方言群と北部方言群に二分され、それぞれがさらに福州グループと福清グループ、福寧グループと浙江グループに下位分類されることが明らかとなった。帰属が問題となっていた蛮話は、北部グループとして扱うのが妥当であることも明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語 方言 びん東語 下位分類 福寧方言群 蛮話
 寧徳方言 びん語

1. 研究開始当初の背景

文化大革命終了後1979年に雑誌《方言》が創刊されたのち、中国方言学界が総力を挙げ取り組んだ最初の課題が中国全土の中国語方言区画図作成であった。その成果は1987-1988年に出版された《中国語言地図集》（中国社会科学院、オーストラリア人文科学院編著、香港朗文出版有限公司出版）に結実する。

中国語諸方言にはB1からB16まで、計16枚の

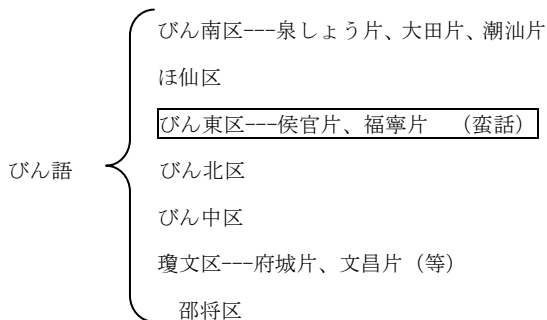
地図が割り当てられている（A1～A5は総合地図、C1～C14は少数民族語関連の地図）。これらの地図はどの地域にどのような方言が分布するかを図示した「方言区画図」である。地図作製の過程で、中国語諸方言の分類が行われた。例えば呉語は太湖片、甌江片、処衢片、後州片、宣州片、台州片大きく六つのグループに分類され、太湖片と処衢片は、例えば後者の処州小片、龍衢小片のようにさらに下位分類される。出版後、中国語諸方言の分類はこの《中国語言地図集》によるのが普通とな

った。

当時としては画期的な成果であったものの、出版後十数年のうちに、中国各地の中国語方言記述は格段に発展した。とりわけ広西壮族自治区北部、湖南省南部、広東省東部に分布する系統不明の方言や山西省に分布する晋語に関する調査、研究の進展は目を見張るものがある。その結果《中国語言地図集》の分類で不適切な部分、足りない部分が認識されるにいたった。このような研究の進展を背景に、中国社会科学院は《中国語言地図集》の見直し、改訂作業に着手している。例えば《方言》2006年第3期掲載の曹志耘《浙江省的漢語方言》など。本研究もこのような流れの中に位置づけられる。

2. 研究の目的

中国語諸方言のうち主に福建省に分布するびん語には《中国語言地図集》B12図が割り当てられ、次のような分類が提示されている：



本研究はこのうち福建省東北部および浙江省南部の一部に分布する「びん東区」の下位分類を再検討しようとするものである。ポイントは以下四点（“片”を以下では「方言群」と、“小片”を“グループ”と訳す）：

- (1) 方言分類のあり方
- (2) 「蛮話」の位置づけ
- (3) 「福寧方言群」の検討
- (4) 寧徳方言の位置づけ

3. 研究の方法

①方言分類のあり方

私が《中国語言地図集》が利用する際もつとも不満を感じるのが、そこで行われた方言分類が一体何を目的とするのかははっきりとしない点である。主編者の一人張振興氏の《重読〈中国語言地図集〉》（《方言》1997年第4期）を読むと「総合的基準」「排他的基準」「人文地理的特徴」を考慮すべしと述べられている（244頁）。そこには言語分類が内包しうる

通時性への言及がまったくない。

本研究では**びん東区方言の系統分類、すなわちびん東区祖方言の存在を仮定した上で、そこから各方言への通時的分岐の過程を反映しうる分類を試みる。**そこで、言語分類、方言分類に関する理論的な検討を、本研究の前提として最初に行う。

②「蛮話」の位置づけ

《中国語言地図集》B12図の「蛮話」の扱いはきわめて異例である。地図上には浙江省蒼南県、泰順県の一部が「蛮話」と図示されている。ところが、地図の解説では“イヌ”を“狗”ではなく“犬”と呼ぶなどびん東区方言的特徴をもつということでびん東区方言の一つの“片(方言群)”だとしながら、分類表ではそれを「片(方言群)」として扱っていない。このようなことは《中国語言地図集》において、「蛮話」にのみ見られるのであり、編者がその扱いに苦慮したことがうかがわれる。その理由の一つにこれらの方言のデータが乏しかったことがある。

私は浙江省蒼南県、泰順県のびん東区方言を詳しく調査し《浙南的びん東区方言》（全284頁）を中央研究院より上梓した。蒼南、泰順方言の同音字表、600語からなる語彙対照、100例文からなる例文対照を含む。このようなまとまった分量のファーストハンドのデータに基づき、びん東区における「蛮話」の位置づけを再検討する。すでに私は《浙南的びん東区方言》において、蒼南方言と泰順方言が地理的に隔絶されているにもかかわらず一つのグループをなす事を示した。そこで本研究のポイントは、これら二方言と福建省内のびん東区諸方言との系統関係の探索ということになる。

③「福寧方言群」の検討

侯官方言群が福州方言、福清方言などを筆頭によく研究されており、また内部差異もあまり目立たない一方、福寧方言群の言語特徴は未だ明確となっていない。これもその主たる原因はこれらの方言データが乏しい点にある。私は平成17年度から平成19年度までの科学研究費補助金を得て福寧方言群の調査に従事している（本調書8頁参照）。これまでに周寧県咸村方言、福安市穆陽方言の重点的な調査、および福鼎、寿寧、柘榮、霞浦四地点の簡略な調査を行った。これらの新データをもとに、侯官方言群と並立する福寧方言群という方言群の設定は妥当か否かを検討する。妥当と思われる場合にはその根拠となる通時的特徴を、妥当ではないと思われる場合にはより妥当な分類案を提示する。

④寧徳方言の位置づけ

《中国語言地図集》B12 図「びん東区」における寧徳方言の扱いは明らかに妥当ではない。そこでは寧徳方言が侯官方言群に分類されている。しかし、寧徳方言は音韻、語彙いずれの面から見ても福州方言等侯官方言群からはかけ離れた方言であることを示す。

4. 研究成果

本科研費研究の総まとめとして論文「論びん東区方言的分区」を中国語で執筆し、「歴時演変と語言接触：中国東南方言国際研討会」（2008年12月17日、香港中文大学）において口頭発表した。以下、この論文の結論を要約することにより、研究成果の概要としたい。

①はじめに

《中国語言地図集》B12 図がびん東語を“侯官方言群、福寧方言群、蛮話”の三種に下位分類していること、およびその根拠を紹介した。

ついで、方言の下位分類が系統分類であるべきで、shared retention は分類の根拠とならず、shared innovation だけが分類の根拠となることを再確認した。以下、この方法でびん東方言の下位分類を再検討する。

②“変韻”とびん東区方言の下位分類

“変韻”とは、通時的には、韻母の音価が声調を条件として分裂する現象を言う。《中国語言地図集》B12 図では、この現象の有無を侯官方言群と福寧方言群を区別する根拠としている。ところが

(1) 寧徳方言や福安方言など《中国語言地図集》B12 図で福寧方言群に分類される方言にもこの現象を持つものがある；

(2) 霞浦方言のように福寧方言群に分類される方言にもこの現象を持たないものがある；

(3) びん東諸方言の“変韻”を詳しく検討すると、関係が近い方言間でも“変韻”の現れに違いが見られ、このことは“変韻”が相対的にお蒼井段階で生じたことを意味している。

以上三点から、“変韻”の有無がびん東区方言の下位分類の根拠とはならないことを論じた。

③びん東区における南北対立

この章ではびん東区の南北対立を実証する。

(1) 南部では鼻音韻尾の対立がまったく存在しない。一方南部では、寧徳、福安、柘栄のように m、n、ng あるいは n、ng が存在する。また鼻音韻尾の対立自体は消失していても、鼻音韻尾の対立が主母音の対立へと姿を変えているケースが多く観察される；

(2) 中古濁入声字の連読変調。北部では陰去の連読変調と同じ、または平行する連読変調であることが多い。このタイプの濁入声字の変調は、南部ではほとんど観察されない；

(3) 果攝開口一等歌韻、合口一等戈韻の扱い。北部では假攝合口二等と合流し、南部では蟹攝合口二等と合流する；

(4) “鶯”類字。南部では福清を除き、止攝開口三等支韻と合流し、北部では假攝開口三等と合流する；

(5) 蟹攝開口三四等、止攝開口三等支韻の音価。南部では ie。北部では介音 i を持たないことが多い；

(6) 宕攝開口三等藥韻および梗攝開口三等昔韻の音価。南部では io? または yo?、北部では主母音に o が現れないことが多い；

(7) 通攝三等舒声字。南部では撮口呼 yng、北部では ung または ong のように開口呼で現れる。

以上、七種の特徴がびん東区方言を南北に分かつ。

もちろん、このパターンからはずれる方言も存在する。特に北部の福鼎方言に現れる南部的は顕著である。北部方言は相対的に遅い段階で上の(5)、(6)を示すようになったと考え、この問題を解釈した。

④福清、屏南黛溪、寧徳方言の帰属

この章では第三章で明らかにしたびん東区方言南北対立の枠組みにうまく当てはまらない方言の帰属を検討した。

(1) 福清方言

他の南部方言の音韻体系が《威音八音》の音韻体系から導ける一方、福清方言の音韻体系がそれからは導かれないことを述べた。

(2) 屏南黛溪方言

屏南の城関方言が典型的な南部方言である一方、黛溪方言は北部方言に近いことを明

らかにした。

(3) 寧徳方言

《中国語言地図集》B12 図は寧徳方言を侯官方言群、すなわち南部の方言として分類している。しかしながら“③びん東区における南北対立”における分析からすると、寧徳方言の北部方言的性格には疑問の余地がない。また寧徳方言は北部においても非常に特殊な方言ということが出来る。

⑤ 蛮話方言群の位置

《中国語言地図集》B12 図は浙江省蒼南県と泰順県に分布するびん東区方言を“蛮話方言群”として独立させている。この章では、この扱いが妥当であるか否かを検討した。

まず“③びん東区における南北対立”における分析から見て、蛮話方言群の北部の特徴はきわめて明確と言える。と同時に、蛮話方言群には、他のびん東区方言には見いだすことのできない多くの特徴が共有されている。

(1) 一部の云母、以母、影母字がゼロ声母ではなく、n、ng 等の鼻音声母で現れる；

(2) 果攝開口一等歌韻、合口一等戈韻が假攝開口二等と合流する場合がある；

(3) 遇攝一等模韻、三等虞韻の精組字が舌尖母音に変化している；

(4) 止攝開口三等微韻見系字が y に変化している。他のびん東語区方言では ui と発音される；

(5) 通攝一等と三等が合流する；

(6) 蟹攝開口一等泰韻、二等皆佳韻の一部が果攝開口一等歌韻と合流する；

(7) 調類の変化が同一。

これらの特徴にもとづいて、蛮話方言群を北部方言から独立させることは妥当のように思われ、現に私が 2005 年に出版した『浙南的びん東区方言』（中央研究院語言学研究所）ではそのように扱った。

しかしながら、

(1) 蒼南、泰順方言における中古濁入声字連読変調のパターンは北部方言と一致しており、これは偶然とは考えられない；

(2) びん東区方言において蒼南、泰順方言に独特と考えられる音韻特徴が、その周辺に分布する呉語甌江方言群としばしば一致す

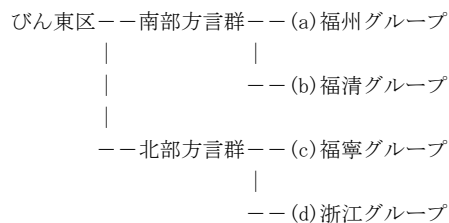
る。この地域にあつては温州方言に代表される呉語甌江方言群が標準語なのであつて、蒼南、泰順方言がその影響を受けることは容易に予想されるところである；

(3) 北部における内部差異は南部における内部差異よりも際だって大きい。蒼南、泰順方言を北部方言の一種と分類したとしても、バランスを大きく崩すことにはならない。

以上三点から、本研究では蒼南、泰順方言を北部方言として分類するものとする。

⑥ 結論

以上から本研究はびん語びん東区方言を次のように分類する。



それぞれに属する方言は次の通り：

(a) 福州、びん清、びん侯、永泰、長楽、古田城関、屏南城関、連江

(b) 福清、平潭

(c) 屏南黛溪、寧徳虎貝、寧徳九都、周寧咸村、霞浦長春、福安穆陽、寿寧斜灘、柘榮富溪、福鼎白琳

(d) 泰順三魁、蒼南炎亭

この分類が、本研究の結論である。

この分類を行う前提として、これまでデータの乏しかった北部方言の音韻・語彙データの収集に努めた。以下“5. 主な発表論文等”に記した論文「びん東霞浦長春音系簡介」はその一部である。自分で調査した霞浦県長春方言の記述（同音字表を含む）、および霞浦城関方言との比較（1000 字からなる字音対照を含む）、この比較から推定されるより早い段階における霞浦方言の音韻特徴、等を論じている。同規模の論文は寿寧斜灘、柘榮富溪、福鼎白琳についても完成している。これらを集成し『びん東区北部四縣市方言音韻概況』（中国語で執筆）としてできるだけ早い時期に刊行したいと希望している。

また 100 年あまり前の福安方言の大型字典『班華字典』の分析も 2007 年度に行った。その成果の一端は

《班華字典—福安方言》の音系。日本中国語学会第 57 回全国大会。2007 年 10 月 27 日。

琉球大学。日本語。

として口頭発表した。現在完成稿を中国の
学術誌に投稿中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 秋谷裕幸. びん東霞浦長春音系簡介. 《中国
語学集刊》(紀念李方桂先生中国語
学研究会、香港科技大学中国語学
研究中心編、中華書局出版發行). 第三
卷第二期に発表予定. 2009 年. 中国語.
査読あり.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 秋谷裕幸. 論びん東区方言的分区. 歴時
演變与語言接触: 中国東南方言国際研討
会. 2008 年 12 月 17 日. 香港中文大学.
中国語.
- ② 秋谷裕幸. びん東区方言における“変韻”
について. 日本中国語学会第 58 回全国
大会. 2008 年 10 月 26 日. 京都外国語大
学. 日本語.
- ③ 秋谷裕幸. びん東区寧德方言の音韻特点
及其帰属. 紀念《方言》創刊三十周年学
術研討会. 2008 年 9 月 11 日. 中国甘肅
省河西学院. 中国語.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋谷 裕幸 (AKITANI HIROYUKI)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号: 1 0 2 6 3 9 6 4

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 海外研究協力者

陳 澤平 (CHEN ZEPING)

福建師範大学・中文系・教授